# 弘法さんかわら版

発行編集部
大塚耕平事務所
☎052-757-1955
Kouhei@oh-Kouhei.org

皆さん、こんにちは。**仏教伝来**をお伝えしている今年のかわら版。今月は**大乗仏教**と**小乗仏教**の違い、そしてインド仏教の顛末についてです。

## ★ 上座部仏教と自利

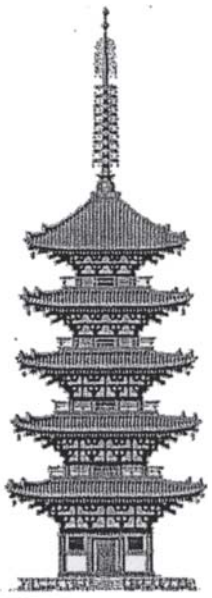
インドでの仏教は、**紀元前三世紀**の**アショーカ王**時代に全土に普及。

この頃のインドは経済発展期。王侯貴族や**長者**と呼ばれる大商人が隆盛を極めました。

極端な教義に走らず、解脱、中道、平和を説く**上座部仏教（部派仏教）**は、そうした上流階級に庇護されました。

僧たちは**精舎**（僧院）にこもり、**アビダルマ**という仏教理論の構築に没頭。修行僧が目指したのは自らの解脱。煩悩を断って**阿羅漢（あらかん）**になることを目的としていました。

部派仏教の僧たちのように、自己の悟りを求めることを**自利（じり）**と言います。



## ★ 大乗仏教と利他

一方、他人を救済することを**利他（りた）**と言います。

お釈迦様は利他を求めたはずであるという考え方から生まれたのが**大乗仏教**。「大きな乗り物を用意してみんなで悟りの彼岸に渡る」という意味です。

大乗仏教の僧たちは、上座部仏教を「小さな乗り物で自分だけが悟りの彼岸に渡る」という意味を込めて**小乗仏教**と揶揄しました。

上座部仏教の自利、大乗仏教の利他。自利と利他は仏教の車の両輪です。

余談ですが、**徳川家康**の旗印は**上求菩提下化衆生（じょうぐぼだいげけしゅじょう）**。

上求菩提は自分の悟りを求める意味で自利、下化衆生は大衆を救うことで利他を意味します。

## ★ 菩薩と仏性

自利と利他は相反する考え方ではありません。自利（悟り）は利他の精神と実践があってこそ、初めて実現するという関係です。

悟りを求める人は**菩薩（ぼさつ）**と呼ばれます。自利と利他を理解して悟りを求める人は誰でも菩薩です。

誰もが悟りを得て仏になれるというのが大乗仏教の考え方です。そして、人だけでなく、万物全てが仏になれる可能性のことを**仏性（ぶっしょう）**と言います。

ここから、**一切衆生悉有仏性（いっさいしゅじょうしつうぶっしょう）**という大乗仏教特有の考え方が生まれました。

## ★ インド仏教の消滅

インドでの大乗仏教の歴史は**三期**に分けられます。

初期は紀元前後から三世紀頃まで。この時期、**般若経、華厳経、法華経、浄土三部経**などの主要な経典が編纂されました。

**ナーガールジュナ**、中国や日本で**竜樹（りゅうじゅ）**と呼ばれる高僧が登場し、約百年間の中期に入ります。

四世紀から八世紀頃までが後期。この間、中国から**玄奘三蔵**がインドに渡り、般若経などを持ち帰ります。また、後に**弘法大師**に受け継がれる密教が誕生したのもこの時代です。

八世紀以降、仏教は**ヒンズー教**と徐々に融合。その傾向に拍車をかけたのが**イスラム勢力**のインド侵入。

十三世紀に登場した**ハルジー王**は密教寺院を破壊し、僧を殺害。生き残った僧は**ネパール**や**チベット**に逃げ、インド仏教は完全に姿を消しました。

玄奘三蔵の坐像

## ★ インドから出た仏教

いよいよ仏教はインドから外国に渡ります。来月は、**スリランカ**、**東南アジア**、**チベット**に伝わった仏教の動きをお伝えします。乞ご期待。